

平成 28 年度

地球環境「自然学」講座

第 1 回

テーマ

2016 年度自然学講座のねらい
-いのちのふるさと海と生きる社会をめざして-

講師

京 都 大 学 名 誉 教 授
舞 根 森 里 海 研 究 所 長
当 講 座 コーディネーター

田 中 克 先 生

平成 28 年 4 月 9 日 (土)

NPO 法人・シニア自然大学校

シニア自然大学校 地球環境『自然学』講座

田中 克 先生 プロフィール

1943 年滋賀県大津市生まれ。琵琶湖のそばで育ち、子供ころの湖・川・森の中で遊んだ原体験、とりわけ琵琶湖でのホンモロコ釣りの体験から、京都大学農学部水産学科に入学して魚の研究の道に入る。舞鶴 10 年、長崎 8 年（水産庁西海区水産研究所研究員）を経て、1982 年より京都大学農学研究科の助教授・教授を歴任し、魚類の初期生活史（稚魚）研究を進める。日本海におけるヒラメ稚魚の研究や有明海における特産稚魚の生態研究を通じて、海の魚も不可分に陸域（森林域）とつながることに気づく。2003 年に京都大学に森から海までのつながりの教育と研究を進めるフィールド科学教育研究センターが発足するとともにセンター長に就任し、新たな統合学問として「森里海連環学」を提唱した。



2007 年に京都大学を定年退職するとともに、ボルネオ島コタキキナバル市にあるマレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所の客員教授(2010 年まで)として、熱帯域における森里海連環の現実を知る機会を得た。2011 年 3 月に発生した東日本大震災とともに、ボランティア研究チームをつくり、森は海の恋人を復興理念と位置づけ、今日までの 5 年間に 30 回の総合調査を進める。同時に、日本の沿岸漁業と沿岸環境再生の試金石と位置づけられる有明海の再生に関する実験と市民活動を進める。

2014 年に発足した舞根森里海研究所長を務める。京都大学名誉教授、環境省「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」アドバイザー、文部科学省東北マリンサイエンス拠点形成事業主査、同海洋生物小委員会主査、NPO 法人森は海の恋人理事、同 SPERA 森里海・時代を拓く理事、同海通路理事、同ものづくり生命文明機構理事、同アースウォッチジャパン科学アドバイザー委員ほか。

著書に「魚類学下」（共著、1998 年）、「森里海連環学への道」（2008 年）、「稚魚の生残と変態」（共著、2009 年）、「水産の 21 世紀－海から拓く食料自給」（編著、2010 年）、「増補改定森里海連環学」（共著、2011 年）、「防災と復興の知－3.11 以後を生きる」（共著、2014 年）、「森里海連環による有明海再生への道」（編著、2014 年）、「スピリチュアリティと環境」（共著、2015 年）、「震災と地域の自然文化－大槌発 未来へのグランドデザイン」（共著、2016 年）など。

講演要旨

2016 年度自然学講座のねらい

ーいのちのふるさと海と生きる社会を目指してー

2016 年 4 月 9 日 田中 克

自然学講座 20 回の講義の構成

本年度の 20 回の講義は、森と里と海のつながりを陸と海の間をめぐり続ける水の循環によってもたらされる命の循環を基本視点に、講師の方々の多様な講義を基本に構成されています。それらの講義は、森関係、里・川関係、海関係ならびに森里海関係に大別されます。

森関係：岡橋清元(4 月 23 日：林業再生)、石崎雄一郎(11 月 12 日：ボルネオ島のオランウータン)、湯本貴和 (1 月 28 日：熱帯雨林)

里・川関係：松浦秀俊 (5 月 14 日：高知のアユ)、近藤洋一 (5 月 28 日：野尻湖のナウマンゾウ)、小関 哲(6 月 25 日：小さな世界学校)、中貝宗治(7 月 9 日：コウノトリの里)、藤岡康弘(8 月 27 日：琵琶湖の生き物の再生)、揖 善継(12 月 10 日：ウナギと暮らし)、山本義和(2 月 11 日：武庫川流域の再生活動)

海関係：鈴木輝明(6 月 11 日：干潟の機能)、中山耕至(7 月 23 日：有明海の生き物)、山岡耕作(9 月 10 日：海通路の勧め)、小西晴子(9 月 24 日：赤浜の漁師の心意気)、松田浩一(10 月 22 日：イセエビの不思議)、松田 治(11 月 26 日：里海を世界へ)

森里海関係：田中克(4 月 9 日：講座の狙い)、鎌田雄介(10 月 8 日：うみやまあひだ) 吉澤保幸(1 月 14 日：ローカルサミット) 田中 克(2 月 25 日：森は海の恋人との協同)

これらの講義を通じて、自然や社会の多様な側面を見直し、知らないところでいろいろなことが不可分につながっていること、そのようなつながりの再生に、自然と社会の再生の鍵が存在することこそ、森里海連環学の真髄であることへの思いを深めていただければとの思いです。それは“つながりの価値観”の再生と言えます。

自然観察会 6 回の構成

自然観察会は、20 回の座学の内容を、現場で確認し、理解を深め、さらにそれぞれの身の丈にあった行動へのきっかけを得ることを目指すものです。日本各地の豊かな自然を観察することは言うに及ばず、それらが今多くの問題を抱え、このままでは続く世代に豊かな未来を残せないとの思いで、多様な取り組みに情熱を傾ける多くの人の取り組みなど見聞することに重点を置いて構成されています。

5 月 13 日(金) 吉野林業現場の観察ー都会に住む私達は林業再生にどのように関われるか？

6 月 21 日 (月) ～23 日(水) 有明海を訪ねてー瀕死の海が私達に問いかけるものは？

8 月 1 日(月)～3 日(水) 高知のアユの再生ー森里海をつなぐアユの復活の道は？

9 月上旬(1 泊 2 日) 愛知川の自然と文化の再生ー琵琶湖は森里海がつながる世界？

9 月 12 日 (月) ～15 日(木) 平戸の自然と文化ー民泊体験から何を学ぶか？

10 月 3 日(月)～5 日(水) ナウマンゾウとアフアンの森ー日本にゾウがいた時代を思う？

12月(日帰り)コウノトリの里作りに学ぶーいのちの循環を見る？

今年の自然観察会は国内に限られますが、日本を見つめ直すことは、世界を変える道にも通じることも頭の片隅に置きながら、現場からの学びの機会とし、2017年度の海外自然観察会への夢を膨らませればと願っています。

いのちのふるさと海と生きる社会の創生

東日本大震災が私達に伝えたメッセージ「自然への畏敬の念を取り戻す」、「大量生産・大量消費の物質文明の破綻」、「技術で自然を制御できるとの過信の戒め」などは、この5年の間に一体どこに行ってしまったのでしょうか。三陸沿岸では、最初に決めたコンクリートの巨大な防潮堤計画によって、津波の襲来を防ぐとの計画がその後の問題の指摘にもかかわらず、一人歩きして着々と建設が進んでいます。東日本大震災の最も深刻な悲劇は、何の落ち度もないのに突然“ふるさと”を追われ、家庭が崩壊することにあると言えます。

海は私達だけでなく、陸上に住むすべての生き物のいのちのふるさとです。人類の直接の祖先は700万年前に地上に現れた類人猿とされていますが、さらに遡って背骨を持った脊椎動物の祖先を考えると、それは今から5億年前後も前に海に誕生した魚類と言えます。魚類の中から陸上への進出を試みるグループが現れ、彼らは水際の暮らしを通じて、陸上生活への進出を可能とする体の仕組みや機能を発達させたと考えられます。つまり、水際は私達の遠い祖先が辿った陸上進出への舞台であったと言えます。私達の究極のふるさとへの道に、いま私達は巨大なコンクリートをの壁を築き、ふるさとを放棄しようとしているのです。このようなおろかな行為の先に確かな未来はあるのでしょうか。

森里海のつながりの再生は非常に大きな課題で、どこを何から攻めていけばよいか難しいことも確かです。森里海連環の考えを深める基盤になった海の魚たち、とりわけその子供達が育つ上でなくてはならない水際の再生を、森里海連環の再生の基本課題と位置づけ、二ホンウナギとアサリと子供達がともに生きる社会の創生を、今後のメインテーマにしています。そのため、2015年7月には京都で学者による「いのちのふるさと海と生きる」シンポジウムを開催し、9月には東京で女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」シンポジウムを開催し、(社)全国日本学士会の会誌「ACADEMIA」に掲載しました。その延長線上で、2016年8月20日には再び京都で女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」京都シンポジウムの開催を予定しています。

2015年の京都での「いのちのふるさと海と生きる」シンポジウムのまとめの論文、これまでACADEMIAに掲載された森里海連環学に関する論文、2015年度自然学講座での畠山重篤さんの講演を基にした原稿、さらに特別寄稿として環境省が展開しています「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトを中心的に推進されている大臣官房審議官中井徳太郎さんの原稿などを加えて、森里海連環学シリーズとしての「いのちのふるさと海と生きる」本の出版を準備しています。本講座の中からも、森里海連環学シリーズの一翼を担う本の刊行ができればと願いつつ、今年度の自然学講座を進めたいと考えています。